

日蓮大聖人御書全集

はりようかんとうごしよ

破良観等御書

新版
1256
ゝ
1263

はりようかんとうごしよ

破良観等御書

けんじ ねん

建治 2 年 ('76)

さい 55 歳

やしろ 弥四郎

こうにちあましそく

えんじや

〈光日尼子息〉の縁者

りようかん どうりゆう

ひがんしようにんとう

ごくらくじ

けんちようじ

じゆふくじ

良観・道隆・悲願聖人等が極楽寺・建長寺・寿福寺・

ふもんじとう た

えいざん

えんどんだいかい

べつじよ

普門寺等を立てて、叡山の円頓大戒を蔑如するがごとし。

だいいち

はそうざい

これは第一には破僧罪なり。

に ほとけ おんみ ち い

いま ねんぶつしやとう

きようしゆ

二には仏の御身より血を出だす。今の念仏者等が教主

しやくそん ごにゆうめつ

にがつじゆうごにち

押

取

あみだぶつ

ひ

釈尊の御入滅の二月十五日をおさえとり、阿弥陀仏の日と

定 ぶつしようにち

ようか

やくしぶつ

ひ

言

いっさい

さだめ、仏生日の八日をば薬師仏の日といい、一切の

しんごんし

だいにちにようらい

恃

きようしゆしやくそん

むみよう

まよ

真言師が大日如来をたのみて、「教主釈尊は無明に迷える

ほとけ われ はきもの 取 およ けつく かんじよう しゃかぶつ

仏、我らが履とりにも及ばず、結句は灌頂して釈迦仏

こうべ 踏 ぜんしゆう ほつしとう きようげ べつでん 罰

の頭をふむ。禅宗の法師等は「教外に別伝す」とののしり

いつさいきよう 反 故 劣 われ ほとけ ちようか

て、一切経をばほんぐにはおとり、我らは仏に超過せり

うんぬん なんいんど だいまん 婆 羅 もん 流 すいぶつしんけつ

と云々。これは南印度の大慢ばら門がながれ、出仏身血の

いちぶん

一分なり。

だいさん れんげびく に う 殺 ほとけ ようぼ

第三に蓮華比丘尼を打ちころす。これ仏の養母にして

あらかん あじやせおう だいばだった 捨 ほとけ 付

阿羅漢なり。これは、阿闍世王の提婆達多をすてて仏につ

たま とき 怒 たいかむね 焼 腹 据

き給いし時、いかりをなして大火胸をやきしかば、はらをす

あま 行 合 そうら う ころ

えかねて、この尼のゆきあい候いたりしを打ち殺せしなり。

いま ねんぶつしやとう

ねんぶつ

ぜん

りつ

しんごん

責

述

今の念仏者等が、念仏と禅と律と真言とをせめられて、のぶ

方

無

けつく

だんなとう

相 語

にちれん

でし

るかたはなし、結句は檀那等をあいかたらいて、日蓮が弟子

ころ

よ

こうべ

傷

讒

奏

にど

を殺させ、予が頭等にきずをつけ、ざんそうをなして二度

るざい

くび

斬

企

でしとう

まで流罪、あわせて頸をきらせんとくわだて、弟子等

すうじゆうにん

牢

もう

い

鎌

倉

うち

ひ

数十人をろうに申し入るるのみならず、かまくら内に火を

にちれん

でし

しよい

触

回

いちにん

つけて、日蓮が弟子の所為なりとふれまわして、一人もな

うしな

く失わんとせしがごとし。

だいはだった

さんぎやくざい

ほとけ

おんみ

ち

出

しかるに、提婆達多が三逆罪は、仏の御身より血をいだ

にぜん

ほとけ

くおんじつじよう

しやか

さつらかん

に

せども爾前の仏、久遠実成の釈迦にはあらず。殺羅漢も爾

ぜん らかん ほけきよう ぎようじゃ

前の羅漢、法華經の行者にはあらず。破和合僧も爾前

しようじよう かい ほつけえんどん だいかい そう だいち 破

小乗の戒なり、法華円頓の大戒の僧にもあらず。大地われ

むけん じごく い ほけきよう さんぎやく

て無間地獄に入りしかども、法華經の三逆ならざれば、

甚 ふか だいば ほけきよう

いとうも深くあらざりけるかのゆえに、提婆は法華經にし

てんのうによらい 成 たも

て天王如来とならさせ給う。

いま しんごんし ねんぶつしゃ ぜん りつとう ひとびと

今の真言師・念仏者・禪・律等の人々、ならびにこれを

ごきえ てんし しょうぐんけ にほんこく じょうげばんにん

御帰依ある天子ならびに將軍家、日本国の上下万人は、

ほけきよう ごうてき うえ いちじよう ぎようじゃ だいおんてき

法華經の強敵となる上、一乗の行者の大怨敵となりぬ。

いっさいきよう さと じつぼう ほとけ きえ いっこく

されば、たとい一切經を覚り、十方の仏に帰依し、一国の

どうとう

こんりゆう

いつさいしゅじよう

じひ

起

しゆるたいかい

堂塔を建立し、一切衆生に慈悲をおこすとも、衆流大海に

い

鹹味

しゅちようしゅみせん

ちか

どうしき

入ってかんみとなり、衆鳥須弥山に近づいて同色となるが

いつさい

だいぜんへん

だいあく

しちふく

しちなん 起

ごとく、一切の大善變じて大悪となり、七福かえりて七難お

げんざいがんぜん

たこく

責

嚴

じしん

つわもの

破

こり、現在眼前には他国のせめきびしく、自身は兵にやぶ

さいし

かたき

取

ごしよう

むけんだいじよう

お

られ、妻子は敵にとられて、後生には無間大城に墮つべ

し。

思

こやしろうどの

だいざい

これをもつておもうに、故弥四郎殿は、たとい大罪なり

だいば

ぎやく

過

しょうざい

とも提婆が逆にはすぐべからず。いかにいわんや小罪な

ほけきよう

しん

ひと

ひと

じようぶつ

り。法華経を信ぜし人なれば、「一りとして成仏せざるこ

となし」疑いなきものなり。
うたが

疑って云わく、今の真言師等を無間地獄と候は心え
うたが いま しんごんしとう むけんじごく そうろう ころろ得

られぬことなり。今の真言は、源、弘法大師・伝教大師・
いま しんごん みなもと こうぼうだいし でんぎようだいし

慈覚大師・智証大師、この四大師のながれなり。この人々、
じかくだいし ちしようだいし しだいし 流 ひとびと

地獄に堕ち給わずば、今の真言師いかで堕ち候べき。
じごく お たま いま しんごんし お そうろう

答えて云わく、地獄は一百三十六あり。一百三十五の
こた い じごく いっぴやくさんじゅうろく いっぴやくさんじゅうご

地獄へは、堕つる人、雨のごとし。その因やすきゆえなり。
じごく お ひと あめ いん 易

一つの無間大城へは、堕つる人かたし。五逆罪を造る人
ひと むけんだいじよう お ひと 難 りぎやくごい つく ひと

まれなるゆえなり。また仏前には五逆なし。ただ殺父・殺母
希 ほとけさき りぎやくく せつぶ せつも

にぎやく

にぎやく

なか

ほとけさき

せつぶ

せつも

の二逆ばかりあり。また二逆の中にも、仏前の殺父・殺母

けつじよう

むけんじごく

お

ちくしよう

にぎやく

は決定として無間地獄へは堕ちがたし。畜生の二逆のご

いま

にほんこく

ひとびと

いつぴやくさんじゆうご

とし。しかるに、今、日本国の人々は、また一百三十五の

じごく

行

にほんこく

ひとびと

かたち

異

地獄へはゆきがたし。日本国の人々、形はことなれども、

おな

ほけきようひぼう

やから

にほんこくこと

おな

ほつけ

同じく法華経誹謗の輩なり。日本国異なれども同じく法華

ひぼう

もの

みなもと

でんぎよう

ほか

さんだいし

ぎ

誹謗の者となることは、源、伝教より外の三大師の義よ

こと起

り事おこれり。

と

い

さんだいし

ぎ

問うて云わく、三大師の義、いかん。

こた

い

こうぼうとう

さんだいし

ぎ

異

答えて云わく、弘法等の三大師は、その義ことなれども、

おな ほけきようひぼう いちどう

同じく法華経誹謗は一同なり。いわゆる、善無畏三蔵・金剛

ちさんどう ふくうさんどう ほけきようひぼう じゃぎ

智三蔵・不空三蔵の法華経誹謗の邪義なり。

と い さんだいし じごく お しょうこ

問うて云わく、三大師の地獄へ墮つる証拠、いかん。

こた い ぜんむいさんどう かんど にほんこく しんこんしゅう

答えて云わく、善無畏三蔵は漢土・日本国の真言宗の

がんそ か ひと とんし えんま 責 値

元祖なり。彼の人すでに頓死して閻魔のせめにあえり。そ

あ ほか とが ほけきよう だいにちきよう おと

のせめに値うことは他の失ならず、法華経は大日経に劣る

た とが し ぎ

と立てしゆえなり。しかるを、この失を知らずしてその義を

弘 じかく ちしょう じごく のが ぜんむいさんどう

ひろめたる慈覚・智証、地獄を脱るべしや。ただ善無畏三蔵

えんま 責 預 ゆえ 尋 明

の閻魔のせめにあずかりし故をだにもたずねあきらめば、

じねん あらわ

ぜんむいさんぞう

くろがね

なわしち

筋

このこと自然に顕れぬべし。善無畏三蔵の鉄の縄七すじ

付

だいにちきよう

しよ

われ

書

そうろううえ

にほん

つきたることは、大日経の疏に我とかかれて候上、日本

だいご

えんまどう

そうしゅうかまくら

えんまどう

の醍醐の閻魔堂、相州鎌倉の閻魔堂にあらわせり。これを

じかく

ちしようとう

とが

し

もつて慈覚・智証等の失をば知るべし。

と い

ほけきよう

だいにち

さんぶきよう

しやうれつ

きやうもん

問うて云わく、法華経と大日の三部経の勝劣は、経文い

かん。

こた

い

ほけきよう

しよきよう

なか

もつと

答えて曰わく、法華経には「諸経の中において最もそ

かみ

あ

と

ほけきよう

いつさいきよう

ちやうじよう

の上に在り」と説かれて、この法華経は一切経の頂上の

ほう

うんぬん

だいにちきようしちかん

こんごうちようきようさんかん

そしつじきようさんかん

法なりと云々。大日経七卷・金剛頂経三卷・蘇悉地経三卷、

いじようじゆうさんかん　うち　ほけきよう　すぐ　もう　きようもん　いっくいちげ

已上十三卷の内、法華經に勝ると申す經文は一句一偈も

そしつじきよう

さんぶ　なか

これなし。ただ蘇悉地經ばかりにぞ「三部の中において、

きよう　おう

もう　もんそうろう

だいにち　さんぶきよう

この經を王となす」と申す文候。これは大日の三部經の

なか　おう

まった　いちだい

しよきよう

なか　だいおう

れい

中の王なり。全く一代の諸經の中の大王にはあらず。例せ

ほんちよう

おう　だいおう

にほんこく

うち　だいおう

ば、本朝の王を大王という。これは日本国の内の大王なり。

まった

かんど

がっし

しよおう

すぐ

だいおう

ほけきよう

全く漢土・月支の諸王に勝れたる大王にはあらず。法華經

いちだい

いっさいきよう

なか

おう

さんぜじつぼう

いっさい

は一代の一切經の中の王たるのみならず、三世十方の一切

しよぶつ

しよせつ

なか

だいおう

れい

だいぼんてんのう

の諸仏の所説の中の大王なり。例せば、大梵天王のごとき

もろもろ

しよおう

てんりんおう

してんのう

しやくおう

まおうとう

いっさい

んば、諸の小王・轉輪王・四天王・釈王・魔王等の一切

おう　すぐ

だいおう

こんごうちょうきよう

もう

しんこんきよう

の王に勝れたる大王なり。金剛頂經と申すは真言教の

ちようおう　さいしやうおうきよう

もう

げどう

てん

せんとう

きよう

なか

だいおう

頂王、最勝王經と申すは外道の天・仙等の經の中の大王、

まった　いつさいきよう

なか

ちようおう

ほけきよう

いつさいきよう

全く一切經の中の頂王にはあらず。法華經は一切經の

ちようじよう

ほうしゆ

ろんじ

にんし

捨

もつぱ

きようもん

比

頂上の宝珠なり。論師・人師をすてて専ら經文をくらべ

ば、かくのごとし。

てんだいしゆうしゆつたい

のち

がつし

渡

きようろん

しかるを、天台宗出来の後、月氏よりわたれる經論、

てんじく

かんど

た

しゆうじゆう

がんそとう

しゆらしん

ならびに天竺・漢土にして立てたる宗々の元祖等、修羅心

差　挟

きようろん

私

をさしはさめるかのゆえに、あるいは經論にわたくしの

ことば

雑

こと

べっせつ

寄

こと

がつし

きよう

言をまじえて事を仏説によせ、あるいは事を月氏の經に

寄

わたくし

ふで

添

ぶつせつ

由

しょう

よせなんどして 私の筆をそえ、仏説のよしを称す。

ぜんむいさんぞうとう

ほけきよう

だいにちきよう

しょうれつ

さだ

善無畏三蔵等は法華經と大日經との勝劣を定むるに

りどうじしよう うんぬん

ぶつ

ぶつせつ

理同事勝と云々。これは仏意にはあらず。仏説のごとくな

だいにちきようとう

しじゅうよねん

うち

しじゅうよねん

うち

けごん

らば、大日經等は四十余年の内、四十余年の内にも華嚴・

はんにやとう

およ

あごんしょうじようきよう

少

般若等には及ぶべくもなし。ただ阿含小乗經にすこしい

きよう

じかくだいしとう

ぎ

わきま

さてたる經なり。しかるを、慈覺大師等は、この義を弁え

ぜんむいさんぞう

おも

思

りどうじしよう

ぎ

ずして善無畏三蔵を重くおもいうゆえに、理同事勝の義を

じつぎ

実義とおもえり。

こうぼうだいし

似

びやくにん

弘法大師は、またこれらにはにるべくもなき僻人なり。

ほけきよう だいにちきよう おと

けこんきようとう

いわゆる、「法華経は大日経に劣るのみならず、華嚴経等に

劣

とううんぬん

じゃぎ ひと しん

もおとれり」等云々。しかるを、この邪義を人に信ぜさせ

だいにちにょらい

しやびよう

んために、あるいは大日如来より写瓶せりといい、あるい

われ目

当

りようぜん

聞

し

は我まのあたり靈山にしてきけりといい、あるいは師の

けいかわじよう

われ

褒

さんこ

投

もう

恵果和尚の我をほめし、あるいは三鈷をなげたりなど申

しゅじゅ

きようげん

構

おろ

もの

いましん

取

し、種々の誑言をかまえたり。愚かな者は今信をとる。

てんだい

しんごんし

じかくだいし

もと

えいざん

さんぜんにん

また、天台の真言師は慈覚大師を本とせり。叡山の三千人

しん

うえ

したが

だいたい

けんおう

みよ

ちよくせん

くだ

もこれを信ずる上、随つて代々の賢王の御世に勅宣を下

ちよくせん

詮

ほけきよう

だいにちきよう

おな

だいご

す。その勅宣のせんは、「法華経と大日経とは同じく醍醐。

たと とり りようよく ひと そう まなこ どううんぬん いま よ

譬えば、鳥の両翼、人の左右の眼なり」等云々。今の世の

いっさい しんごんし ぎ 過 ほたるび にちがつ

一切の真言師は、この義をすぎず。これらは、螢火を日月に

こ 思 みみず かざん たか ぎ うえ

越ゆとおもい、蚯蚓を華山より高しという義なり。その上、

いっさい しんごんし かんじよう 名 しゃかぶつ ただ 書

一切の真言師は、灌頂となづけて釈迦仏を直ちにかきて

敷 曼 荼 羅 名 でし あし 踏

しきまんだらとなづけて弟子の足にふませ、あるいは

ほけきよう ほとけ むみよう まよ ほとけ ひと なか 蝦夷

「法華經の仏は無明に迷える仏、人の中のえぞのごとし。

しんごんし はきもの 取 およ 文 作 いま

真言師が履 とりにも及ばず」なんど、ふみにつくれり。今

しんごんし ふみ ほんじよ 名 ひびよ よ だんぎ

の真言師は、この文を本疏となづけて日々夜々に談義して、

くげ ぶけ 祈 号 多 しよりよう ちぎよう

公家・武家のいのりとごうしておおくの所領を知行し、

檀那をたばらかす。

だんな 誑
じ こころ あん

事の心を案ずるに、彼の大慢ばら門がごとく、無垢論師

異

か だいまん 婆 羅もん
げんしん あび たいか まね
ひとびと

にことならず。これらは現身に阿鼻の大火を招くべき人々

ごうてき

過

なれども、強敵のなければさてすぐるか。しかりといえど

徴 がんぜん 見

じかく ちしよう もんけとう

も、そのしるし眼前にみえたり。慈覚と智証との門家等、

とうじよう 隙

こうぼう しようがく ばっそん ほんじ でんぼういん えいざん

鬪諍ひまなく、弘法と正覚が末孫が本寺と伝法院、叡山と

おんじよう

そうろん しゆら しゆら さる いぬ

園城との相論は、修羅と修羅と、猿と犬とのごとし。これ

じかく むそう ひ 射 見 ころぼう げんしん もうご 末

らは慈覚の夢想に日をいるとみ、弘法の現身の妄語のすえ

か。

ほとけ まつだい しる のたま ほうぼう もの だいちみじん おお

仏、末代を記して云わく「謗法の者は大地微塵よりも多

しょうほう もの そうじよう ど 少 ぶつご

く、正法の者は爪上の土よりすくなかるべし」。仏語

実 いま にほんこく き 当

まことなるかなや、今、日本国、かの記にあたれり。

よ 知 そうろう ようしやう とき

予は、かつしろしめされて候がごとく、幼少の時より

がくもん こころ 懸 うえ だいこくうぞうぼさつ ごほうぜん がん た

学文に心をかけし上、大虚空蔵菩薩の御宝前に願を立て、

にほんだいいち ちしや たま じゆうに 年 がん た

「日本第一の智者となし給え」、十二のとしよりこの願を立

しやがん しさい いま 詳 載

つ。その所願に子細あり。今くわしくのせがたし。

のち じようどしゆう ぜんしゆう 聞 のち えいざん おんじよう

その後、まず浄土宗・禅宗をきく。その後、叡山・園城・

こうや きようじゆう いなかとう しよしよ しゆぎよう じたしゆう ほうもん 習

高野・京中・田舎等、処々に修行して自他宗の法門をなら

いしかども、我が身の不審はれがたき上、本よりの願に

しよしゅう

しゅう

へんとう

しゅうしん

「諸宗いずれの宗なりとも、偏党・執心あるべからず。

ぶつせつ

しょうこふんみょう

どうりげんぜん

もち

いずれも仏説に証拠分明に道理現前ならんを用いるべし。

ろんじ

やくしゃ

にんしとう

依

もつぱ

きょうもん

せん

論師・訳者・人師等にはよるべからず。専ら經文を詮と

ほうもん

おう

責

せん。また、法門によりては、たとい王のせめなりとも、

憚

はばかりべからず。いかにいわんや、その已下の人をや。

ふぼ

しけいとう

きょうくん

もち

ひと

しん

父母・師兄等の教訓なりとも、用いるべからず。人の信・

ふしん

知

もう

せいじょう

た

不信はしらず、ありのままに申すべし」と誓状を立てしゆ

さんろんしゅう

かじょう

けこんしゅう

ちようかん

ほつそうしゅう

じおんとう

えに、三論宗の嘉祥・華嚴宗の澄観・法相宗の慈恩等を

てんだい みようらく でんぎようとう むけんじごく 責 しんごんしゅう

ば天台・妙楽・伝教等は無間地獄とせめたれども、真言宗

ぜんむいさんぞう こうぼうだいし じかく ちしようとう びやつけん 責

の善無畏三蔵・弘法大師・慈覚・智証等の僻見はいまだせ

ひと ぜんむい ふくうとう しんごんしゅう 捨 てんだい 依

むる人なし。善無畏・不空等の真言宗をすてて天台による

みようらくだいし き じゅう ごじょ でんぎようだいし

ことは妙楽大師の記の十の後序ならびに伝教大師の

えびようしゅう 載 詳

依憑集にのせられたれども、いまだくわしからざればにや

じかく ちしよう みようご しゅつたい ごうじよう 責

慈覚・智証の謬誤は出来せるかと、強盛にせむるなり。

もう ねんさんじゅうに けんちようごねん はる ころ

かく申すほどに、年三十二、建長五年の春の比より

ねんぶつしゅう ぜんしゅうとう 責 始 のち しんごんしゅうとう

念仏宗と禅宗等をせめはじめて、後に真言宗等をせむ

ねんぶつしやとう はじ 悔 にちれん 賢

るほどに、念仏者等、始めにはあなずる。「日蓮いかにかしこ

みようえんぼう

こういんそうじよう

けんしんざすとう

過

くとも、明円房・公胤僧正・顕真座主等にはすぐべから

かひとびと

ほうねんしようにん

難

のち

ず。彼の人々だにもはじめは法然上人をなんぜしが、後に

お

しようにん

でし

もんけ

みな堕ちて、あるいは上人の弟子となり、あるいは門家と

にちれん

彼

われ詰

われ

逸

なる。日蓮はかれがごとし。我つめん、我つめん」とはやり

古

ひとびと

ほうねん

難

ぜんどう

しほどに、いにしえの人々はただ法然をなんじて善導・

どうしやくとう

責

きよう

ごんじつ

言

道綽等をせめず、また経の権実をいわざりしかばこそ、

ねんぶつしや

傲

いま

にちれん

ぜんどう

ほうねんとう

むけんじごく

念仏者はおごりけれ。今、日蓮は、善導・法然等をば無間地獄

突落

もつぱ

じようど

さんぶきよう

ほけきよう

押

合

につきおとして、専ら浄土の三部経を法華経におしあわせ

責

ほたるび

にちがつ

こうが

たいかい

うえ

てせむるゆえに、螢火に日月、江河に大海のようなる上、

ねんぶつ ほとけ

けろん ほう まこと

「念仏は仏のしばらくの戯論の法、実にこれをもつて

しようじ

離

思

たいせき

ふね

つく

たいかい

渡

生死をはなれんとおもわば、大石を船に造つて大海をわた

たいさん

けんなん こ

なん

り、大山をになつて嶮難を越ゆるがごとし」と難ぜしかば、

おもて

向

ねんぶつしや

面をむかうる念仏者なし。

のち

てんだいしゅう

ひとびと

語

同士 打

後には、天台宗の人々をかたらいてどしうちにせんとせ

叶

てんだいしゅう

ひとびと

責

しかども、それもかなわず。天台宗の人々もせめられしか

ざいけ

しゅつけ

こころ

ひとびと

しょうしやうねんぶつ

ぜんしゅう

捨

ば、在家・出家の心ある人々、少々念仏と禅宗とをすつ。

ねんぶつしや

ぜんしゅう

りつそうとう

わ

ちりよくかな

しよしゅう

念仏者・禅宗・律僧等、我が智力叶わざるゆえに、諸宗に

い

歩

しゅじゅ

ざんそう

ざいけ

ひとびと

ふしん

入りあるきて、種々の讒奏をなす。在家の人々は不審ある

おのおの じそうとう

しんごんし

ねんぶつしゃ

ゆえに、各々の持僧等、あるいは真言師、あるいは念佛者、

古 てんだいしゅう

ぜんしゅう

りつそうとう

あるいはふるき天台宗、あるいは禅宗、あるいは律僧等を

脇 挟

にちれん じゅうしよ む

わきにはさみて、あるいは日蓮が住处に向かい、あるいは

呼 いちごんにごん

過

かせんねん

かしこへよぶ。しかれども、一言二言にはすぎず。迦旃延が

げどう 責

とくえぼさつ まとうば 詰

外道をせめしがごとく、徳慧菩薩が摩沓婆をつめしがごと

責 ちからおよ

くせめしゆえに、その力及ばず。

ひと ち 賢 もの 少

けつく ねんぶつしやとう

人は智かしこき者すくなきかのゆえに、結句は念佛者等

詰 叶 だいまよう 物 覚

をばつめさせてかなわぬところには、大名してものおぼえ

さむらい 楽 せんご わきま ざいけ とくいんとう

ぬ侍ども、たのしくて先後も弁えぬ在家の徳人等、こぞ

にちれん

怨

わたくし

ろうぜき

つて日蓮をあだするほどに、あるいは私に狼藉をいたし

にちれん

方

もの

う

ところ

追

ち

て日蓮がかたの者を打ち、あるいは所をおい、あるいは地

立

勘

当

数

知

かみ

そう

をたて、あるいはかんどうをなすことかずをしらず。上に奏

ひと

しゆ

ひと

かいりき

ふくでん

もう

すれども、人の主となる人は、さすが戒力といい、福田と申

しさい

思

そう

とが

し、子細あるべきかとおもいて左右なく失にもなされざり

切

者

寄

合

町

人

とう

語

しかば、きりものどもよりあいて、まちゆうど等をかたら

すうまんにん

もの

よなか

押

寄

うしな

いて、数万人の者をもつて夜中におしよせ失わんとせしほ

じゅうらせつ

おんはか

にちれん

なん

のが

どに、十羅刹の御計らいにてやありけん、日蓮その難を脱れ

りようごく

り

こころ

合

ころ

しかば、両国の吏、心をあわせたることなれば、殺され

科

いずのくに

流

さいみようじどの

ぬをとがにして伊豆国へながされぬ。最明寺殿ばかりこそ、

しさい

思

急

許

子細あるかとおもわれて、いそぎゆるされぬ。

さいみようじにゆうどうどのかく

たま

さりしほどに、最明寺入道殿隠れさせ給いしかば、いか

悪

急

隠

よ

にもこのことあしくなりなんず、いそぎかくるべき世なり

思

ほけきよう

方

人

とはおもいしかども、これにつけても、法華經のかとうど

強

いちじようじ出

きた

しんみよう

捨

つよくせば一定事いで来るならば身命をすつるにてこそ

おも

き

ざんそう

ひとびと

数

知

あらめと思ひ切りしかば、讒奏の人々いよいよかずをしら

じようげばんにん

みな

ふぼ

敵

遊

女

ず。上下万人、皆、父母のかたき・とわりをみるがごとし。

ふきようぼさつ

いおんのうぶつ

末

少

違

不輕菩薩の威音王仏のすえにすこしもたがうことなし。